

1994年9月6日

\* 「女性と宗教 - キリスト教を中心に - 」 \*\*\*

大阪市立大学文学部 芦名定道

## 1 : 問題

現代日本は、1970年代半ばより新たな宗教ブームを迎えている(第三次宗教ブーム)。科学技術が隆盛を極めている一方で、新しく生まれた宗教(新宗教、新々宗教)多くの人々が引きつけられて行くのを見ることができる。それは、マスコミを騒がしている一部の宗教団体に限った現象ではない。この最近の宗教ブームを分析して気づくことは、このブームの主たる担い手が、若者と主婦であるということである。なぜ、現代の若者や主婦が宗教に引きつけられていくのか、彼らは何を求めているのか、これは極めて興味深い問題である。さて、このように、一方で様々な宗教活動を支える主な担い手は多くの場合女性である、しかし他方において宗教教団における女性の地位は決して高くはない。これは、最近の新宗教においても、またキリスト教、仏教、イスラム教、神道といった伝統的な諸宗教においても変わらない現実である。一見すると矛盾したこの事態をどのように理解したらよいのであろうか。女性に焦点を合わせるとき、宗教はどのような姿を表してくるであろうか。以下、キリスト教を具体的な分析材料とすることによって、「女性と宗教」という我々に与えられたテーマについての考察を進めて行こう。

## 2 : キリスト教と女性

キリスト教における女性観について考える際に注意する必要があるのは、キリスト教の母体となったユダヤ教社会が典型的な家父長制社会であったということである - キリスト教の神は「父なる神」であり、神に「母的性格」を読み取ることは困難である - 。この男性中心的な性格は初期のキリスト教にも反映している。そもそも、イエスの弟子たちの中心は12人の男性によって占められており、イエスとの密接な関わり合いにかかわらず、女性の弟子は弟子集団の指導的な地位にはついていなかったように思われる。この状態は、イエスの死後設立された原始キリスト教会においても同様であった。「聖なる者たちのすべての教会でそうであるように、婦人たちは、教会では黙っていなさい。婦人たちには語ることが許されていません。律法も言っているように、婦人たちは従う者でありなさい。何か知りたいことがあったら、家で夫に聞きなさい」(第一コリント 14:33 ~ 35)。

## 3 : 新約聖書の女性

聖書には、個性的で魅力的な人生を生き抜いた少ないからぬ女性が登場するが、ここでは新約聖書に現れた「マリア」という名の女性に注目することにしよう。

マリアと言えば、イエス・キリストの母マリアを思い起こす人が多いかもしれない。しかし、新約聖書に登場し、イエスを取り巻いていた女性たちの中には複数のマリアたちが存在していたのである(ヨハネ 19:25、マタイ 27:56、使徒言行録 12:12)。彼女らはそれぞれに極めて個性的な光を放っている。以下、これらのマリアたちに関する記事を検討することによって、聖書の女性観について考えてみよう。なお、以下の引用は、『新共同訳聖書』(日本聖書協会)から行うことにする。

イエスの母マリア

「『わたしは主のはしためです。お言葉どおり、この身になりますように』(ルカ 1:38)

「わたしの魂は主である神をあがめ、わたしの霊は救い主である神を喜びたたえます。この身分の低い、この主のはしためにも目を留めてくださったのですから。……主はその腕で力を振るい、思い上がる者を打ち散らし、権力ある者をその座から引き降ろし、身分の低い者を高く上げ、飢えた者を良い物で満たし、富める者を空腹のまま追い返されます」(ルカ 1:46 ~ 56)

「イエスがなお群衆に話しておられるとき、その母と兄弟たちが、話したいことがあって外に立っていた。そこで、ある人がイエスに、『御覧なさい。母上とご兄弟たちが、お話ししたいと外に立っておられます』と言った。しかし、イエスはその人にお答えになった。『わたしの母とはだれか。私の兄弟とはだれか』。そして、弟子たちの方を指して言われた。『見なさい。ここにわたしの母、わたしの兄弟がいる。だれでもわたしの天の父の御心を行う人が、わたしの兄弟、姉妹、また母である』(マタイ 12:46 ~ )  
イエスの母マリアに関する新約聖書の記事は、この女性に対する様々な評価を反映している。一方では神に従順な女性像、他方では子供への愛のあまりイエスを理解できない母親、そして「マリアの讃歌」において宗教的、経済的、政治的に差別され、抑圧された人々に対する神の恵みを高らかに歌ったマリアなど。

#### マグダラのマリア

「週の初めの日、朝早く、まだ暗いうちにマグダラのマリアは墓にいった。……マリアは墓の外に立っていた。泣きながら身をかがめて墓の中を見ると、イエスの遺体の置いてあった所に、白い衣を来た二人の天使が見えた。……」(ヨハネ 20:1 ~ 18)

十字架上で処刑されたイエスに最後までしがたがったのは、12人の男性の弟子たちではなく、元悪霊つきでイエスに助けられたマグダラのマリアなどの女性の弟子たちであった。

#### ベタニアのマリア

「一行が歩いて行くうち、イエスはある村にお入りになった。すると、マルタという女が、イエスを家に迎え入れた。彼女にはマリアという姉妹がいた。マリアは主の足もとに座って、その話に聞き入っていた。マルタは、いろいろのもてなしのためにせわしく立ち働いていたが、そばに近寄って言った。『主よ、わたしの姉妹はわたしだけにもてなしをさせていますが、何ともお思いになりませんか。手伝ってくれるようにおっしゃってください』。主はお答えになった。『マルタ、マルタ、あなたは多くのことに思い悩み、心を乱している。しかし、必要なことはただ一つだけである。マリアは良い方を選んだ。それを取り上げてはならない』(ルカ 10:38 ~ 42)

「過越祭の六日前に、イエスはベタニアに行かれた。そこには、イエスが死者の中からよみがえらせたラザロがいた。イエスのためにそこで夕食が用意され、マルタは給仕をしていた。ラザロは、イエスと共に食事の席に着いていた人々の中にいた。そのとき、マリアが純粋で非常に高価なナルドの香油を一リトラ持って来て、イエスの足に塗り、自分の髪でその足をぬぐった。……弟子の一人で、後にイエスを裏切るイスカリオテのユダが言った。『なぜ、この香油を三百デナリオンで売って、貧しい人に施さなかったのか』。……イエスは言われた。『この人のするままにさせておきなさい。わたしの葬りの日のために、それを取って置いたのだから。貧しい人々はいつもあなたがたと共にいるが、わたしはいつも一緒にいるわけではない』(ヨハネ 12:1 ~ 8)

#### 4：宗教は女性を解放するか？

イエスの宗教思想の特徴は、人間を縛っている様々な束縛（宗教的な束縛を含めて）からの解放という点に認めることができるが、それは以上見た女性との関わりからとくにはっきりと読み取ることが可能である。人間を非人間化する既存の価値観、つまりユダヤの伝統的な宗教観を逆転するイエスの発言は、その後に男性中心主義に逆戻りしたキリスト教会を超えるものとして、現代の思想状況においてその意義をいよいよ明らかにしつつある。伝統的な宗教や新しい新宗教が古い家族観や女性観を引きずっている場合が少なくないのに対して、キリスト教に限らず本物の宗教と呼ばれるに値する宗教は、女性を女性として肯定し認める思想、つまり女性と男性の双方を人間として解放する思想をわたしたちに示しているのである。

#### < 参考文献 >

##### A：新宗教と女性

1:いのうえせつこ 『主婦を魅了する新宗教』（谷沢書房）

##### B：宗教と女性

2:奥田暁子・岡野治子編 『宗教の中の女性史』（青弓社）

3:大越愛子・源淳子・山下明子 『性差別する仏教』（法蔵館）

##### C：聖書と女性

4:荒井 献 『新約聖書の女性観』（岩波書店）

5:R.R. リューサー 『マリア 教会における女性像』（新教出版社）

##### D：フェミニスト神学

6:リューサー 『人間解放の神学』（新教出版社）

7:キャロル・クライスト/ジュディス・プラスカウ編 『女性解放とキリスト教』（"）

8:メアリ・デイリー 『教会と第二の性』（未来社）